明石の史跡（３２）本多政利と瓜坊

歴代の明石藩主のなかで、廃藩置県により藩主の座を返上した１７代松平直致（なおむね）以外は、就任期間が平均１４年半。なかでも７代目の本多政利の、足掛け４年というのは異例というほかない。種々の不行跡が取り沙汰されているものの、現状では決め手に欠けるようである。

藩主本多政利は、大力者として高名で、なおかつ大食でも知られ、「人には珍敷生れなり」と評されている。彼は、毛に紋のある瓜坊を好んで飼育した。ただ牙の先は削って丸くして、おそらく城内（殿中）放し飼いにしており、随分と成長したようである。猪の子供のことを、「江戸にて瓜ぼうといふ、畿内にてこぶりことよぶ」（物類称呼／岩波文庫３２頁）とあって、現在では、江戸での表現が一般化している。

ある時、近習の士が、成長した猪をもてあそんでいたところ、急に駈けだし、野田本庵という医師を掛け倒してしまった。医師はその場に臥せってしまい、取り押えようとした近習の者が、これまた数人掛け倒され、ついに殿にまで乗り掛けようとした。ところが政利は、あわてず笑いながら、猪の頭を股に挟んで締めつけたため、動きを封じられた猪は、目・口より血を流しつつ、即死の状態であったという（明良洪範＝めいりょうこうはん／広文庫１１．９３７頁）。恐るべき力と表現するしかない。

元禄直前の、社会のシステムが完成しかかった時代には、物腰の穏やかで、人間関係の維持に巧みさが求められ、なおかつさわやかな弁舌が尊重される世の中に、猪を即死に追い込む大力は、人々に一舜の驚きは与えるが、それ以上のインパクトは期待できなかつたろう。乱世ならば、このような自己表現は、また別の存在感があったと思われるのに…。

日本歴史学会会員　茨木　一成